様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ３ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ１６７６２

研究課題名（和文）中世抄物の註釈の展開ー『山谷幻雲抄』『黄氏口義』の比較によるー

研究課題名（英文）The Development of the Annotations in the Shomonos (commentaries written in kana on Chinese classic books) -By Comparing "Sangoku Gen-un-sho" and "Koshi-kugi"-

研究代表者
蔦　清行（TSUTA, Kiyoyuki）

大阪大学・日本語日本文化教育センター・准教授

研究者番号：２０４５２４７７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：　黄山谷の詩の抄物（室町時代に作られた漢字カタカナ交じり文の注釈書）は、抄物の中でも、最も多数の伝本が残っているものの一つである。その中でも『山谷幻雲抄』は、『黄氏口義』とともに、多数の禅僧の学説がまとめられたものである点、および林宗二が編纂に関わっている点で貴重である。
　本研究課題では、『山谷幻雲抄』に引用されている禅僧・書籍の、網羅的な索引を作成した。また作成された索引に基づきながら、『黄氏口義』『山谷幻雲抄』で相違する学説・注釈等が、どのような傾向を持つのか、概観的なレベルで検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　抄物は、中世後期の文化人たちが、中国の詩文や思想をどのように受容していたかを、まさにその受容の現場のレベルで明らかにする資料である。これを用いて、中世の注釈史研究に新たな視角を提出したことが、本研究課題の最大の意義である。
　特に、本研究課題では、『山谷幻雲抄』と『黄氏口義』の構成の違いを明らかにした。これによって、抄物の編纂者が、どのような資料をどのように利用していたかが判明した。これは、近世、さらには近現代へと学問史（外国の典籍をどのように学んでいたか）がつながっていることを示した点で、社会的にも意義を有するものである。

研究成果の概要（英文）：Shomonos (commentaries written in kana on Chinese classic books) on poems by Huang Tingjian (黄庭堅, also commonly referred to as Huang Shangu (山谷)) have one of the most numerous groups of manuscripts among the Shomonos in the middle age. Among them, “Sangoku-Genunsho", as well as "Koshi-kugi", is valuable because it contains theories by many famous zen monks, and because Rin Soji joined editing these two manuscripts.
In this research project, I made an exhaustive index of the names of zen monks and books cited in "Sangoku-Genunsho". In addition, based on the index, I examined the difference of the theories or the annotations in "Sangoku-Genunsho" and "Koshi-kugi" at an overview level.

研究分野：日本文献学

キーワード：抄物　五山文学　林宗二　註釈　日本語史

１．研究開始当初の背景

『黄氏口義』および『山谷幻雲抄』は、室町時代、黄山谷の詩に対して付けられた抄物である。黄山谷の抄物は多くのものが残っているが、この二点の抄物はその中でも、次の二つの点で、極めて重要なものである。

（1）分量が非常に多い（『黄氏口義』は二十二冊、『山谷幻雲抄』は二十一冊）。

（2）引用されている禅僧・内外の書物が多数に上る。

研究代表者は、これまで、『黄氏口義』とそこに引用されている他の注釈書・学説との関係を中心に研究を進めてきており、科研費助成金（研究課題番号 24720095、課題名「引用人名・書名より見る『黄氏口義』の学史・文化史的意義」）の交付を受けて、『黄氏口義』の人名・書名索引を作成した。これにより、『黄氏口義』がどのような人物の説を受け入れ、また内外のどのような典籍を利用していたかが一覧できるようになり、研究の利便性は大いに向上したと自負している。この索引を利用した成果として、研究代表者は口頭発表「『黄氏口義』そのものが語る『黄氏口義』の成書過程」（第百十二回訓点語学会研究発表会口頭発表）、および論文「両足院所蔵『黄氏口義』の構成と成立について」（『訓点語と訓点資料』第百三十五輯）を発表した。

ただ、それらの研究成果においても強調したところであるが、『黄氏口義』に引用される他の人物の学説は、ほとんどが現在書物の形では残っていないものである。そのため、編者林宗二がもとの資料をどのように改変して（あるいは、改編せずに）利用したかというところまでは、『黄氏口義』を見ているだけでは分からない。『黄氏口義』のみに範囲を限った研究は、ここに限界があるのである。

２．研究の目的

その限界を克服し、旧研究課題を発展的に継承すべく、本研究課題では『山谷幻雲抄』に注目する。『山谷幻雲抄』は『黄氏口義』と同じく林宗二が編纂に関わっており、また特に漢文部分において両者には共通する学説・注釈の引用が非常に多いことが知られている。しかもそれらの学説・注釈は全体としては共通しつつも、細大において異なっていることがある。それは、字句の単位のわずかな場合もあるし、内容のレベルにまで及ぶ場合もあるが、いずれにしてもその『山谷幻雲抄』との異なりを通じて、当時の学説・注釈が、次の世代の注釈に継承される際に、どの程度改変されうるかを明らかにすることが、本研究課題の目的となる。

従来の研究においては、抄物というものはそもそも、国語学的な研究のための用例を提供するためのものとしか見なされてこなかった。従って内容面に注目されることもほとんどなく、そこに記される学説・注釈に注目する研究は寥々たるものがある。

その意味で、本研究のような課題は大いに独創的なものである。従来は一言語資料にとどまる存在であった抄物を、それ自体ひとつの文藝的な、あるいは注釈書的な資料と認める点に、その学術的な特色を認めることができる。

このような方向の研究のわずかな先行例としては、『太平記』において表明される人物評と、抄物に見られるその人物に対する評価とを対照することによって、『太平記』作者の教養の範囲を限定しようとする森田貴之「『太平記』の漢詩利用法　―司馬光の漢詩から―」（『国語国文』第七十九巻第三号、二〇一〇年三月））が挙げられるが、同趣の研究は極めて少ない。それは、これまで整備されてきた抄物がほとんど国語学的研究のために作られてきたため、という理由が大きい。たとえば語彙索引はあっても人名・書名索引はなく、さらに言えば目次さえも、巻の区切りのような形式的なものを備えていればいい方で、内容上の目次、たとえばそれぞれの詩などの注釈がどこから始まるのか、といった目次を備えた抄物研究資料は、ほぼないのである。

本研究代表者は、このような状況に大きな危惧を抱いており、本研究はその打開に向けた一つの試みでもある。その研究結果は、そこに登場する先行の禅僧の説や、内外の書物を中心とする注釈史研究の基礎とすることができる。これによって、従来は殆ど国語学者のみの専有物であった抄物が、日本文学研究者（特に五山文学などの分野）や、中国文学研究者、あるいは和漢比較文学などの研究者に対して、開かれたものとなるのである。先に挙げた森田氏の論文でも、蘇東坡の詩に対して付けられた抄物『四河入海』を利用しているが、網羅的な人名索引があれば、より広い範囲での影響関係を考えることが可能であったはずである。

まとめて言えば、抄物という資料を多くの分野の研究者に開かれたものとし、それを文化的な資料として活用できるようにすること、そしてその学史的・文化史的展開を明らかにすることで、中世の注釈史研究に新たな視角を提出することが、本研究の意義である。

３．研究の方法

以上を踏まえて、本研究課題においては、次の２点を主たる方法とする。

（1）旧研究課題における『黄氏口義』と同様に、『山谷幻雲抄』に引用されている禅僧・内外の書籍・およびそれに登場する人物の、網羅的な索引を作成する。

（2）作成された索引に基づきながら、『黄氏口義』『山谷幻雲抄』で相違する学説・注釈等が、どのような傾向を持つのか、概観的なレベルで明らかにする。

それは、これらの抄物が、先行する抄物・注釈書類をどのように利用し、またそれをどのように乗り越えていったのか、明らかにするということでもある。それがどの禅僧を中心として

どの範囲まで及ぶのか、といったところまでを明らかにすることを、本研究課題の範囲と位置づけたい。

４．研究成果

研究方法の（1）として設定していた『山谷幻雲抄』の書名・人名索引を、2019 年 3 月、『研究成果報告書』の中で公開した。これは、『山谷幻雲抄』全 21 巻中に引用されている禅僧名・著作名の網羅的な索引である。『黄氏口義』が 3500 項目程度の索引であったのに対し、『山谷幻雲抄』は 7000 項目に近いものとなり、後者の方がはるかに多くの説を取り入れていること、それでも『幻雲抄』に存在せず、『黄氏口義』にのみ存在する系統の抄もあることなどが明らかになった。代表的なものは、瑞渓周鳳とその別号「北禅」であり、瑞渓自身は「刻楮」の名で『黄氏口義』『山谷幻雲抄』いずれにも多数登場するのであるが、「北禅」の名では『黄氏口義』に限られ、『黄氏口義』が明らかに『幻雲抄』とは異なる根拠資料を参照していたことが明確になったのである。

論文その他の研究業績としては、「５．主な発表論文等」の雑誌論文（2）として挙げた「中世文化人たちの蘇東坡と黄山谷」では、主に禅僧たちの日記の記述を調査することによって、中世後期当時の蘇東坡と黄山谷の受容について、従来の蘇東坡をより重要視する見解の是非を確認しようとした。結果として、蘇東坡は古典としてより重んじられる地位にあったと考えられるのに対し、黄庭堅は日常の景・状との一致を楽しむような側面が観察された。その違いは、程度の差というよりも、楽しみ方の性格の違い(クラシックか、ポップか)と結論づけられた。

雑誌論文(1)「中世後期の漢故事と抄物」およびそれに先立つ学会発表(2)「Chinese Anecdotes in the Shomono」は本研究課題の直接の成果というわけではないが、抄物について言及する中で本研究によって得られた知見が生かされているほか、本研究で作成した索引が極めて有用であった。

学会発表（1）の「ゾンゾ攷」は、『黄氏口義』『山谷幻雲抄』の引用文献を遡及的に検討することで、「ゾンゾ」という語が特別な意味をもっていたとする従来の研究の主張を退け、原典の音に近い形で翻訳されているという、臨時的な使用であることを明らかにした。これも、抄物がどのような資料を用いて作られているかという側面を無視しては読解できないことを示した業績である。

そのほかにも、本研究課題を通じて、いくつかの研究の着想を得られた。たとえば黄氏口義・幻雲抄両抄中に現れる人名「竹田快翁」について先行研究があることを発見した。また、黄氏口義・幻雲抄に現れる桃源瑞仙の説の内容から、現在桃源の説を一韓が聞き書きしたとされている抄についてその真偽を確認することができることに気づいた。これらは今後雑誌論文等で発表することになる。

一方、残された課題もある。本研究課題は、作成された索引に基づきながら、本資料が『黄氏口義』との関連において、学説の受容という面でどのように位置づけられるかを明らかにすることも所期の目的としていた。両抄の編纂者たる林宗二は、博士や禅僧のような生業として学問をする者ではない、言わばアマチュア研究者として最初の存在と位置づけられる。その学問の様相を知ることは、日本学問史上大きな意味を持つことであろうという見通しがあった。またこれによって、従来は殆ど国語学者のみの専有物であった抄物が、日本文学研究者や和漢比較文学などの研究者に対して、開かれたものとなると期待される。

だが当初見込んでいたよりもはるかに多くの引用が存在していたこと、それゆえに『黄氏口義』との関係の考察も複雑にならざるを得ないこと、などから、本研究の研究期間中には果たせなかった。これについては『山谷幻雲抄』の解題という形で他日成果を発表することを計画している。

今回研究成果として報告する索引においては、主に五山禅僧とその著作とを項目として取り上げた。これは、上述のとおり、彼らの学説を研究する手がかりとすることを目的とするためである。ただし彼らの説の基盤にあるのは、言うまでもなく、中国で作成された注釈や、舶来の学説である。しかもこれまでの研究から、禅僧達の多くは、史書や四書五経を直接参照していたのではなく、『事文類従』や『詩人玉屑』などの類書を参照していたことが判明している。どのような類書がよく使われたのか、ということは、当時の学問がどのようなものであったか、ということをより鮮明に明らかにすることにつながるであろう。あるいは、『黄氏口義』に引用される、五山僧達の利用していた類書は、同時代の他の学問分野と比較して、どのような特徴があるのか、といったことも問題にあるであろう。これらは、今回の研究に含めるには至らなかったが、今後の課題として取り組むことが望まれるものである。

以上、本研究課題の成果をまとめて言えば、抄物という資料を多くの分野の研究者に開かれたものとし、五山禅僧達の学問的交流や相互の関係をあきらかにする基盤整備を進めたこと、そして、そのようなものとして抄物という資料をとらえ直すきっかけとした、ということになる。研究代表者は、それが、国語学的な見地からはもとより、文化史的・学史的にも、大きな意義を有すると信ずるものである。

５．主な発表論文等
〔雑誌論文〕（計 2 件）
（1）2018 年　蔦清行「中世後期の漢故事と抄物」森田貴之・小山順子・蔦清行編『アジア遊学』223(勉誠出版、9 月）招待論文、pp.182-195
（2）2017 年　蔦清行「中世文化人たちの蘇東坡と黄山谷」『日本語・日本文化 44 号』 査読有、pp.1-30

〔学会発表〕（計 2 件）
（1）2018 年　蔦清行「ゾンゾ攷」（第 32 回日本語日本文化教育研究会）
（2）2017 年　TSUTA Kiyoyuki, Chinese Anecdotes in the Shomono (commentaries written in kana on Chinese classic books), EAJS2017(15th International Conference of the European Association for Japanese Studies), Lisbon

６．研究組織

(1)研究代表者
研究代表者氏名：蔦　清行

ローマ字氏名：TSUTA, Kiyoyuki

所属研究機関名：大阪大学

部局名：日本語日本文化教育センター

職名：准教授
研究者番号（8 桁）：20452477

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。